

Zoom Up

人

車を洗うような気軽さで
板を滑りやすく手入れするだけで
スキーはもっと楽しくなる



斎藤 昭博 さん

●さいとう・あきひろ リンドウなどの農業の傍ら「チューンナップ工房さいとう」を開く。スキーやスノーボードなどのチューンアップを行い、ことしで4シーズン目となる。趣味は釣りと音楽鑑賞。「右向け右ではないのは確か」と自分の性格を分析する。「人が思いつかないことを考えてみる」をモットーとする。血液型A型のやぎ座。安代寄木在住。



ス

スキーの町に生まれ、子どものころからスキーをするのが当たり前という環境の中、道具としてのスキーを整備できるところが身近になく、それ困っている人たちが意外にも多かった。斎藤さんは、そんな人たちの要望に応えたいと「チューンナップ工房さいとう」を始めた。旧安代町に生まれた斎藤さんは高校卒業後、就職のため一度は故郷を離れたが、実家の農業を継ぐためUターンし、リンドウの栽培に取り組む。そして、ほかのリンドウ農家と同じように農閑期となる冬の間、スキー場に勤めた。ここでスキーのチューンアップと出会うことになる。チューンアップとは、スキー板などを滑りやすいように整備すること。一般用のスキーから競技用のスキーまで、数多くのス

キー板を整備していく中で、技術は磨かれていった。工房を始めたころは、目に見えてスキー人口が減っていた時期で、不安がなかったわけではないという。「けど、始めるなら今しかないと思った。家族には事後承諾だったよ」と当時を振り返る。小屋を作業場に改造し、高価な専用の機械を導入した。「チューンアップには専用の道具だけでなく、ホームセンターなどで、代用できる安い道具を探してアレンジして使ってるんだよ」と利用する人たちの負担を抑えるための努力を惜しまない。技術も専門誌やインターネットなどで調べ、独学で磨いている。スキー指導者などからのアドバイスも参考にしているという。斎藤さんにチューンアップする喜びを尋ねると「使い込まれた板をピカピカにのみがえらせることかな」と作業中のスキー板を見つめながら教えてくれた。きれいに整備されたスキー板は、競技をする人たちだけのものではない。一般の人たちにもこそ感じてほしい、思い通りに滑る、曲がる、止まるスキーの楽しさ。それを伝えようと、今日も斎藤さんはスキー板の整備に汗を流す。